

施設名

豊和保育所（匝瑳市、公立保育所）※今年度から

アドバイザー氏名

堀江 節子（元小学校教諭）

派遣期間及び回数

令和6年7月～12月 計10回

今年度の活動記録

【7月16日】

➤ 今後の進め方について協議

- ① 年長児、年長児組（年長児2名、年中児8名の混合保育）を中心に実施する。
- ② 小学校教師の経験を活かし、小学校につなげる科学的思考を育てるあり方を支援する。
- ③ 園の行事、食育の機会を中心に訪問をする。

【7月22日】

➤ 23日に実施される行事「おにぎりづくり」について打ち合わせ

① くめあて>

- おにぎりづくりを楽しむことにより、食への関心を持つことが出来る。
- 日頃から目にしているご飯の素になる稲の成長について興味を持つ。
- おにぎりの形から、丸、三角、四角の形を体感することができる。
- おにぎりづくりの歌から、おにぎりの作り方がわかる。話す順序の言葉を知ることができる。

② <展開について>

- 絵本を読み聞かせ、おにぎりづくりへの興味を持たせる。
- 園の前の田んぼで栽培されているのが、おにぎりの材料である米（稲）であることを知らせ、絵本を使って稲の成長を紹介する。
- 絵本の中から、どんな形のおにぎりを握りたいかを聞き、おにぎりの歌で握り方を知らせる。
- 好きな形のおにぎりを2個握る。
- 試食

【7月23日】

➤ おむすびづくり

- ① 絵本を通して、おむすびの形に目を向けることが出来た。
- ② おむすびの材料がごはん（米）であることは、全員知っていたが、米が毎日目にしている稲であることは、全員認識していなかった。絵本で稲の成長を紹介する

と、「知っている」「見たことがある」などの声があがった。日頃意識がなかっただけで、これから日々観察の声が聞かれることを期待したい。

- ③ おむすび作りでは、すぐに「丸い形にする」「三角」「四角」など自分の作りたい形に取り組んでいた。三角が難しい子には、手のひらを三角にすると良いことを助言する。全員が楽しそうに2個のおにぎりを作ることが出来た。

➤ 今日の活動と今後の取り組みについて担任と話し合い

- ① 園児が10人であるので、10の構成に目を向けやすいことを知らせる。10の掲示物の作成と毎日のお休みの人数と登園人数の確認の実施、並ぶ時の番号かけなどの実践を提案する。
- ② 時刻を意識させるために、時計の作成と日々の言葉かけが大切であることを話す。
- ③ 年中児は、数は唱えることが出来るが、対応して数えることが出来なかったため、自由遊びの際、無限ブロックが何階に積めた、何個建てられた、など数えることを実践させてほしいことを伝える。
- ④ 水遊びの際、的があったら飛ばす工夫が生まれることを期待できる。

👉 おにぎりを家でも作り、家族と一緒に食べた子もいた。夏野菜が実り、自分たちから気が付いて収穫を楽しんでいる。「長い針がいくつになったらかたづけ」等の言葉がけを多くし、時計を確認する子が増えてきている。朝の会で「今日のお休みは、〇〇さんです。今いる人は何人？」等を恒例にするようにした所、年長児は即座に答えられるようになってきている。

【8月19日】

➤ 23日に実施される行事「シャボン玉遊び」について打ち合わせ

- ① くめあて>
- シャボン玉遊びを楽しむことが出来る。
 - 色々なシャボン玉を試し、違いに気づくことが出来る。
 - シャボン玉が空気を吹き込むと出来ることに気づくことが出来る。
 - 絵本やシャボン玉の作り方の本を紹介することにより、分からない事の調べ方が分かる
- ② <展開について>
- どうすればシャボン玉を膨らませることが出来るか。
 - シャボン玉の絵本、シャボン玉の作り方を調べた本の紹介。
 - シャボン玉液を作って見せる。

{	1液：洗剤1 対 洗濯のり5 対 水6.5
	2液：洗剤1 対 グリセリン7 対 洗濯のり3
 - シャボン玉あそびをする。

【8月23日】

➤ シャボン玉あそび

- ① シャボン玉の絵本の読み聞かせを行い、息をゆっくり吹くことや、いろいろな道具を使うと楽しめることが理解できたようである。

- ② わからないことや調べたいことがあったら、図書館で本を借りることが出来ると紹介。
- ③ シャボン液作りでは、子どもの前で液を入れ泡立て器でかき混ぜさせた。
「ねばねばしている」「濃くて回らないよ」等と、液の状態を体感させることが出来た。
- ④ 初めは1液をカップに分けて配る。ストローを使うと小さな輪がたくさんできた。ゆっくり吹くと大きくなることを発見した子もいた。小さな針金を使うと少し大きなシャボン玉を風の力で飛ばすことが出来た。次に、2液と毛糸をまいた大きな輪を使うと大きく粘りのあるシャボン玉が出来た。色もきれいですぐには消えないシャボン玉であった。どうやったら大きいシャボン玉が出来るか飽きずに何度も試していた。

➤ 今日の取り組みについて担任と話し合い

- ① シャボン玉遊びは2液が壊れにくく、色の良い大きなものが出来てよかった。
- ② 子ども達も飽きずによく活動していた。シャボン玉が息や風で膨らむことが分かっていたが、それが空気であることを理解していた子が一人であった。その子の発見を皆に伝えたと納得していた。
- ③ 液の材料もあるので再度挑戦したいとのことであった。

【9月10日】

➤ 保育の観察

- ① 自由遊びの後、後片付けの時間の指示があり、時間になると年長児の一人が「お片付けの時間だよ」と知らせ、時計を見ることが出来ていた。
- ② 朝の会で出席を取った後、「今日のお休みは何人かな」と聞かれると、「3人」。「来ている人は」と聞かれると全員が急いで数え始める、「7人」。「先生が3人、教室にいる人は全部で何人かな」。また数え始めるが、1人E児のみが10人と答えられた。数を数えることが習慣化されてきた。
- ③ ひらがなの学習（年長児2名）

くめあて>

- ・初めてのひらがな学習に興味を持つことができる。
- ・正しい鉛筆の持ち方や手首の動かし方を知ることができる。
- ・「あいうえおの歌」を歌から言葉の楽しさに気づくことができる。

<活動>

- ・2人とも鉛筆の持ち方がまだ出来ていなかった。「持ち方君」を使って正しい持ち方を練習、すぐに出来るようになる。
- ・鉛筆を持って手首の運動をする。横横、縦縦、ジグザグ、まるまる、うねうね等の手首の動きをする。
- ・「あいうえおの歌」を紹介。一緒に楽しそうに音読する。

【10月18日】

➤ 保育の観察

- ① 女児3名と保育士とトランプのババ抜きで遊んでいた。A児は6と9の区別が出来ず、保育士に「これなあに」とたびたび聞いていた。神経衰弱ではB児はやり方を理解し、カードを取ることが出来ていたが、C児はカードの数字と位置を覚えることが難しかったようである。
- ② 出席を取った後、「今日のお休み一人だね、みんなは何人」。即座に「9人」と答えられる。「先生は3人、全部で何人」。一斉に人数を数え始める。数が分からないと数えてみるものが定着してきている。
- ③ くひらがなの学習（年長児2名）
 - 「あいうえおの歌」を覚えたというので2人に披露してもらった。楽しそうに大きな声でやってみせてくれた。
 - 鉛筆は「持ち方君」に慣れ、上手に持てるようになっていた。手首の練習も可動域が大きくなり、スムーズに動かせていた。
- ④ じゃんけん大会
くめあて>
 - じゃんけんあそびを楽しむことができる。
 - 10までの数を数えることができる。
 - ドングリを使うことにより、季節を感じるすることができる。
＜活動＞
ドングリを使ってじゃんけん大会。
ルール：ひとり10個ずつドングリを持つ。2人でじゃんけんをし、ぐうで勝つと1個、ちょきで勝つと2個、ぱあで勝つと3個もらえる。
 - 10個が数えられなかった子2名に対しては一緒に数えて準備した。D児は初め、何で勝つといくつももらえるか理解できていなかったが、何度か繰り返すうちに出来るようになった。出来るようになったことを褒めると嬉しそうであった。最後にドングリの数を数え順番を決めた。10個以上取れた子が数名いて順番を決めることは難しいかと思われたが、E児に助けられて順番を決めることが出来た。

【10月25日】

➤ 保育の観察

- ① 女児3名とトランプ。前回6と9の区別がつかなかったA児も自分で数字の組み合わせが出来ていた。何度もやるのが大切。
- ② 塗り絵で遊んでいた2名は「先生、赤と白で何色になるかわかる？」「何色になるの？」と聞くと、「ピンク」。続いて「赤と青は？」「緑と黄色は？」と聞かれ、それぞれ得意げに教えてくれた。
- ③ 朝の会、「今日は何日、何曜日？」で始まる。即座に答えられる子が多くなってきている。「明日は何曜日？」にはちょっと間が空く。「今日はお休みがなかったね、

みんなは何人？」には即座に答えられる。「先生は3人、全部で何人？」には2人が即座に答えられる。

④ すうじあそび

くめあて>

- ・「すうじのうた」の絵本から1～10までの数字に興味を持つことができる。
- ・数字と対応してドングリを数えることができる。

<活動>

・数字の歌クイズ

自作した数字カードを見せながら「すうじのうた」に出てくる数字が何に見えるかをクイズにする。「数字の1はなあに？」「えんとつ」。数字カードに1個シールを貼る。「では、シールと同じだけドングリをとりましょう」全員がドングリをとる。2, 3, 4と進むとD児が難しくなってきたため一緒に数えてやる。5以上になってくると歌詞が分からなくなり、「なんだっけ？」「そうだった」と盛り上がる。10までいって、みんなで歌を歌って終わりになった。終わった後に「ああおもしろかった」と満足げな声が聞けた。

➤ 今日の取り組みについて担任と話し合い

- ① 掲示物の色彩が豊かであったこと、塗り絵時の混色のことを報告すると、1学期にやった色遊びの成果であったとのこと
- ② 「すうじのうた」は歌ったことがあったが、クイズにすることでより楽しめていた。数字を5本の指と対応して出せるように、シールを5ずつの2段に貼るようにしたので、これからも子どもたちが見てすぐにわかると思う。

👉 日頃の絵の中にも素敵な色合いが出せるようになっている。数が1つずつ増えていくことが理解できたようである。

【11月11日】

➤ 保育の観察

- ① 女児3名とトランプ。ババ抜きでは自分で数字の組み合わせが出来ていた。
- ② いつものように「今日は何日、何曜日」で始まる。みな元気に即座に答えられる。「今日はお休み1人、先生は3人、全部で何人？」みんなで数え始める。「12人」「そうです。みんなで12人ですね」

③ まねっこあそび「あいうえお」

くめあて>

- ・口徑をまねて「あいうえお」を楽しむことができる。
- ・正しい発音を知ることができる。

<活動>

- ・舌だし、巻き舌等のまねっこをする。予想していた通りC児には難しかったようである。その他に2名巻き舌が出来なかった。子どもたちは「できた。」「むずかしいよ。」と楽しんで活動することができた。
- ・ケーキのろうそく吹きをし、息の出し方の練習

- ・口径図の口の開け方を参考に「あいうえお」の歌を歌う。か行、さ行にいくにつれて、あ段い段の口径にも気付き意欲的に発言する子が増えていった。指導後、さっそく「あ い う え お」と練習する姿が見られた。

➤ 今日の取り組みについて担任と話し合い

- ① 担任から口径指導の観察の様子を聞く。C児が気になるとのこと。健康推進課からもらった「口径機能不全症」のパンフレットを紹介した。所長も同席であったので所長会の話題にしたいとのことであった。保護者への働きかけや継続練習をお願いした。
- ② 給食時の偏食や食べるのが遅い子が舌の動きの悪いことが分かった。硬い物の摂取は、園では事故防止のため出せるものが制限されるようになってきているとのことであった。
- ③ 「どんぐりころころ」の3番の作詞をしたものを紹介する。

【12月18日】

➤ 保育の観察（おみせやさんごっこ）

くめあて>

- ・おもちゃのお金を使って買い物を楽しむことができる。
- ・10円玉を10個どう使い切るか考えることができる。
- ・買ったおもちゃで楽しむことができる。

① <商品>

子ども達が折ったサンタクロースの折り紙	10 円
私が作った折り紙のコマ	30 円
クリスマスツリー	20 円
ぶんぶんゴマ	20 円
手裏剣	20 円
あやとり	10 円

② <ルール>

折り紙で作った10円玉を1人10個ずつ配り、1人100円使い切る。

売り子は担任とアドバイザー。

- ③ 商品の説明でぶんぶんゴマを鳴らすと「おー」。折り紙のコマを回すと「すごい！」などの反応。購買意欲が大いに高まった。
- ④ 始まると、一番人気のぶんぶんゴマの列が長くなった。色違いで2個買った子もいた。折り紙のコマは好きな色を選ぶことができた。人気はすぐに遊べるものであった。D児はお金の出し方が分からず、教わる場面もあったが、ほとんどの子が自分で考えて支払いが出来ていた。
- ⑤ 買い物が終わり遊ぶ場面では、全員がぶんぶんゴマから遊びはじめ、初めはなかなか回らなかったが、教えると出来る子が増え始め、真剣に練習していた。手裏剣では、黒板に的を描いて投げ方を教えると楽しそうに遊んでいた。あやとりも教えたが、難しかったようである。折り紙のコマは簡単に回り楽しんでいたが、

簡単であると出来てしまった後は魅力を感じない様であった。

➤ 担任と園長代理と振り返り

① 子ども達が喜んで取り組むことが出来ていた。お金の支払いも1名を除いて理解できていた。

② 品物の内容もすぐに遊べるもので良かった。あやとりは、今はやることが少なくなってきたが、伝承遊びも経験させていくことが大切。一人、あやとりを器用に出来る保育士がいたので、後日子どもたちに披露して欲しいと伝えた。

👉 これまでの成果として、年長児2名についてはきれいな平仮名が書けるようになってきている。文字に興味がなかった子も、読んだり書いたりしようとしている。数に対しても、当初数えることが出来なかったD児も数えられるようになってきた。日々の取り組みの成果である。

活動を通じての感想等

【施設の感想等】

◎どの活動も年長児主体となるもので4歳児(月齢の低い子)には難しいように感じた。しかし、シャボン玉やお店屋さんごっこなど、楽しく参加できる活動もあったので子ども達も一緒に楽しんでいただけたと思う。シャボン玉では、実際にシャボン玉の液を作っているところを見て普段経験できないことをする事ができた。

5歳のひらがなの進め方は私も初めての年長で手探りだったこともあったので、一緒に進めてもらい安心でき、子ども達も楽しみながら、ひらがな、数字を進めていくことができた。4歳児の男児は、全くひらがな数字に興味がなく難しそうにしていたが、どんぐりを使って一緒に数を数えたり、数字に触れていったことで読めたり、数えられるようになってきた。

◎堀江先生はとても気さくな方で、年長児2名年中児8名と少人数クラスに寄り添い、少人数ならではの計画に沿って行ってくださいました。特に年長児さんの活動では、就学を意識した、お店屋さんごっこ、シャボン玉あそび、木の実遊び等展開できる遊びの他、ひらがなの書き方、読み方は丁寧に一人ひとりが無理なく進められるような指導が見られ、自信がなかった子供達も「間違っても大丈夫」と言う気持ちがついたようでした。子供達も「先生いつ来る?」と信頼関係を築く姿も見られ流石に子供達を引き寄せる力が素晴らしく参考にさせて頂きたいことが沢山見られました。

次年度等に繋いでいただければ、保護者支援や対応等もアドバイスして頂きたいという意見が保育士からでました。宜しくお願い致します。

【アドバイザーの感想等】

・年長、年中児の混合体育で能力差がある中での指導であり、難しさも感じたが年中児にとっては多くの事を体験する機会が得られ成長することが出来た。年長児にとっては、2人と言う少人数では、集団としての学びが不足しがちであろうが、年下との触れ合いにより、リーダー性もしっかり育っていた。

・担任保育士との共通理解を図ることにより、継続して取り組むことが出来た。あさの日課としての出席や欠席人数、先生を入れると全部で何人、並ぶ時の順番を言うなど数える機会を多くすることにより、数の理解が深まった。数を指で出すことを多くした。5と10を意識させることにより、加減の計算の素地になると思う。又、「〇〇時になったら、片付けよう。」等と時間を意識して指示することを実践してもらった。活動中でも時計を見ながら活動できるようになり、時間に対する理解が出来てきた。

・意欲的な子ども達で、どの活動に対しても意欲的に楽しむ姿が見られた。

・毎回活動の前に、担任との打ち合わせを持ちたかったが、後半日々忙しい中であったので話し合いを持つことが出来なく、当日の活動になった日もあった。事前打ち合わせの時間が取れ、共通理解が図れたら、もっと効果的であったと思われる。

・自然の取り組みの機会が少なかった。芋や夏野菜の栽培活動からもできたと思われる。自然の多い地域なので散歩などの活動も取り入れたらと考える。

・園長をはじめ園の皆さんの好意的な協力に感謝である。

施設名

ケヤキッズ保育園（松戸市、公私連携保育所）※前年度から継続

アドバイザー氏名

吉田 治子（聖徳大学講師）

派遣期間及び回数

令和6年5月～12月 計14回

今年度の活動記録

【5月27日】

➤ 統括園長、園長、主任、ADで打ち合わせ

① <園として抱えている課題について>

- ・要支援児が年々増え、年齢別保育が成り立たなくなってきた。
- ・クラスの枠を取り払うことで、個々の発達に合わせた無理のない保育が展開できるのではないか。
- ・同年齢では難しかった課題が異年齢では軽減される実践例を他園見学で学んだ。
→異年齢交流を含めたインクルーシブ保育の実施

② <保育の質を高める（「科学的思考力を育てる」を軸に）ための今後の方向性>

- ・昨年度訪問アドバイスしていく中で、支援児の受け入れ態勢、落ち着く環境をどう保障するかが他児の保育の充実とも大きく絡んでいた。
- ・「インクルーシブ保育の在り方をさぐること」＝保育の質を高める（科学的思考力を育てる）に繋がるものと言える。まずは、園の目指すところを根本から見直す良い機会にしていく。

【6月14日】

➤ 保育の観察後ミーティング

① <3歳児のクラス的环境について>

子どもが落ち着いて遊べないことで、子どもの遊びを追うことが難しい。子どもが落ち着いて遊べるような環境づくりについてアドバイス欲しいと依頼がある。

○改善点

- ・広い部屋に子どもが所在なく転々とし遊んでいた。
→棚を移動してコーナーを作ることで落ち着いてきた。

○気になった点

- ・使用していないおもちゃ・絵本が、散乱している。それだけでも荒い動きを引き出してしまう。まずは先生がみせるところから始め、子どもたち自身が片付けられるように移行していく（子どもが自ら片付けやすい環境を考える）。
- ・プラスチックの食べ物、ガシャガシャする動きを誘いがち（ひっくり返したり、扱いが乱暴になる傾向あり）。おもちゃもいつも同じように棚に用意されて

いなくてもいい。発達段階を考えて、出し入れしていくのが良い。

② <ままごとコーナー>

- 次々とイメージを膨らませ、遊びを展開していく男児（A児）。ブロックの収納ボックスにプレイマット等、様々なものを入れ、最後自分が中に入る。座り方次第でひっくり返りそうになる。自分の座る位置を工夫する姿＝バランスをとる＝科学的思考が働いていたと考えられる。
- A児の遊びの展開に他児も影響を受けやすい。A児の遊びの要求に保育者が応えていくことで、A児、他児共に遊びの充実に繋がる様に考える。
→関わり方、環境設定等工夫の余地有りと伝える。

【6月21日】

➤ 前回のアドバイスを受けて

- ① ままごとコーナーを広くする（段ボールハウスを作り遊んでみた）
- ② ブロックを減らす（発達に合わせて出し入れする）
- ③ ままごとコーナーで使用する、見立てられる素材（フェルト等）作成中

保育観察

① <段ボール遊び>

- 段ボールの輪を使って、キャタピラ、車、自分スペースをつくる、縦に重ねるなど様々なイメージで活用している。
- 2つ繋げるのに、手で抑えている→洗濯ばさみがあると良いと提案
- 自分スペースにしたい、仲間と入りたい、段ボールが遊び方によって、広げられるように輪でなくて、板になっているものもあってよいか。
→科学的思考に繋がる（使う用途によって面積を広げたり、縮めたり）

② <ままごとコーナー>

- ままごとコーナーにテーブルを持って主任が入り、子どもの興味関心を引き出すように関わる→テーブルが遊びの拠点になり、4～5人の子どもたちが遊ぶA児、先週よりじっくりと同じ遊びを続ける姿あり。
- B児、仲間に入ろうと強引に狭いところに入った為、押し合いになる。B児、その場に座るという主張を下げることはしないが、テーブルにこれ以上物をのせることは無理と判断し、キッチン台にポットを置く⇒思考力、判断力

【6月28日】

➤ 保育園リーダー会議に参加

① <悩み—3歳児>

- 保育者の言葉がけで悩む。どんな言葉をかけたら子どもの心に響くか模索
→保育者同士気にかけて、指摘しあったり、良いと思ったら真似ていこう。

② <悩み—4歳児>

- 活動が子どもの興味関心から出発しているかどうか？保育者の一方的な思いが先行していないか？魅力があれば、やりたくなるはず。
- 保育計画（年間計画・月案・週案）に囚われてしまうから、「やらせないと」と

なってしまうのでは？週案をはじめ、保育計画（書き方含む）そのものを見直す必要があるのでは。

③ <悩み—5歳児>

- 最初は、積極的に下の子とも関わっていたが、最近決まった子どものみになってきた。同年齢と遊びたい思いが出てきた。

→仲間関係が育ってきている証拠、良いこと

👉園をより良くするために足元から保育を見直そうとしている活力を感じた。子ども主体の保育、子どもの姿から始まる保育を目指して、保育計画そのものを考え直そうとしている。時間割的な保育が今は、中心になっているが、インクルーシブ保育の話し合いを重ねていくうちに子ども主体の保育に近づいていくことを期待する。科学的な視点での遊びも子どもの姿を追うことから気付いていける様引き続き働きかけていきたい。

【7月12日】

➤ 保育の振り返り等

① <スライム遊び>

- それぞれの子どもに一定量のスライムをトレーに分け渡す→思い思いに感触を楽しむ。ちぎる、指でつぶす、友だちのスライムに混ぜたり、逆にもらったりする（量を増やしたり減らしたりする中での変化を楽しむ）。
- テーブルにスライムを置き、トレーでつぶす（ぺったんこスライム製造）→つぶすためではなくスライムの上に軽くトレーを乗せ、コロコロ前後に揺する（太い棒状のスライム製造）→偶然できた形に「みてみて！」の興奮の声が上がる。
- 棒状のスライムの中央を持って、上へ持ち上げると左右が重力で下がり床につきそうになる→「キヤー」と更なる興奮の声が上がる

👉保育者は、子どもたちがスライムと向き合っている間、特に制限を与えず、思いのままに取り組めるよう時間と場を提供していた。それが最善の行為だったと考えられる。自らスライムの特性に気付き、可塑性のある遊びに夢中になっていた。「おもしろいね！」「すごいこと考えたね！」保育者の共感的まなざしが、遊びの継続にも繋がっていた。

【7月26日】

➤ 保育園リーダー会議に参加

① <指導計画について>

- 期案、月案どちらか1つあればいい。
- 何を大切にするのか、その軸はしっかり持っていくように。何のためにやっているのかあいまいにならないように要注意。
- たくさんを狙わない。絞っていく。子どもが発展させていくことが大事。

👉保育を深めていくことの楽しさを園長はじめ、保育者たちが感じていることが伝わってくる会議だった。エピソードを出し合う中で、子どもから学ぶことが

たくさんあると改めて気付いていた。子ども同士、子どもと保育者、保育者同士、みな育ちあいをキーワードに高め合っていたらと思う。今日は、「子どもの関係性」をどう繋いでいくかが話題の中心だったが、会議を重ねていくことで、遊びの充実、そして科学の目を育むという視点での気づきにも繋げていきたい。

【8月9日】

➤ 保育の振り返り等

① <紙粘土遊び>

- 指導者が紙粘土の塊の中に綿棒で絵具を入れ、子どもに渡す。
→こねることで色が広がってカラー粘土になる様を楽しむ
- 型抜きを楽しむ子どもと粘土を丸めて楽しむ子どもという。串を提示する。
→お団子のイメージに繋げる姿もある。
- プラカップを指導者が出す→思い思いにカラー粘土を詰めていく。
- 続けてスプーンを提示→スイーツのように見立てる姿も出てくる。丸めた団子をプラカップに詰める姿も出てくる
- 棚の上にあるアイロンビーズが目にとまり、子どもたちが要求してくる。粘土のトッピングとして型抜きの上にのせるという見本を示した上でビーズを皆で使用するように出す。
→我先にビーズをかき集める子ども、見本のようにトッピングとして使用する子ども、たくさんつけることでふりかけをイメージする子ども、様々な姿となる。

② <考察>

- アイロンビーズを要求のままに出したところ大混乱になったあたり、個々に用意すべきだったと造形指導者は、振り返りをしていた（3歳児では初めてやった活動とのこと）。3歳児の発達段階では、予想される姿であることを伝え、確かに混乱を招いていたが、その中でも周りを見て、選択し、自分の満足いく作品を作り上げていた子どももいたことを伝える。混乱も全てが悪いわけではない。子どもの選択する能力を発揮する場にもなり得ることを話す。
- 約1時間の活動ではあったが、展開が早すぎたことも否めない。提示物がどんどん増え、じっくり、その素材と向き合ったり、イメージを膨らます余地があまりなかったように感じた。3歳児ゆえに提示物の量とタイミングを考えると良い。科学的思考にまで行きつかない展開の早さだった。

👉今年度は、園としても、子どもたちの遊びが充実して（科学的視点の遊びを深めるためにも）、かつ保育者も子どもの姿をよく見て保育を考察できるような保育室環境作りを意識してきている。

【9月13日】

➤ 主任保育士と保育の振り返り（インクルーシブ保育の実践経過報告）

- ① これまで午後の時間（午睡から目覚めて順次）過ごすことが多かったが、8月お盆あたりから、英語、体操の時間をはじめ、午前中から好きな場所で過ごすなど

積極的に交流を続けてきた。→成果として、3 歳児のクラス活動で落ち着かなかった子が「みんな座っているから」という理由で着席して食事をしたり、何かしらの影響（刺激）を受けていることが分かった。

- ② クラスを固定していった方がいいかどうか議論。今までは自分で過ごしたい部屋を選択して、過ごしてきた→固定クラスにしていくと行きたくなるかもしれない（悩み）→しばらく今の状態を続けてみることになる

➤ 3 歳児担任と保育の振り返り

- ① 子ども自身交流を積極的に行っていたが、今日はいつもの姿がなかったとのこと。
→5 歳児の一斉活動の中に入っていた 3 歳児 2 名が部屋を出たがったり、保育士に抱かれる、膝の上にいるなどの姿あり
- ② 交流も最初は、物珍しくとっつきは良かっただろうが、慣れてきたところで停滞することもある。刺激よりも安定を求める時期もある。そんな時は、無理に交流させなくても良いのではないだろうか。子どもたちに遊びや場所を選択させるのも良いが、時には保育者が意図をもって、過ごさせることも大切なのでは？新たな子どもの姿、関係性の発見に繋がり、保育に変化が持てる。

👉 取り組みは必ずしも順調に常に進むわけではない。つまりきからの学びの方が大きいかも。そろそろ上手くいかない話が出てきていいころだと思ふ旨、伝えた。その方が、本音が出しやすいのではないかと考えた。

【9 月 27 日】

➤ 保育園リーダー会議に出席

- ① <各クラスの悩みに対する経過>
 - 【5 歳児】異年齢で過ごすことが、当たり前になってきた。年齢が下の子に対して、特別扱い（お客様扱い）しなくなった。（何でも優先的に物を貸したり、やってあげたりしない）兄弟のように厳しい扱いも見られるようになった。
- ② <育ちあい保育（インクルーシブ保育）のクラス編成について>
固定すべきか、固定せずに進めるべきか。現状は、子どもの意見を尊重し、行きたいクラスに行き遊んでいる。
→全員が全員を知る経験として行っている（子ども同士だったり、保育者と子どもだったり）＝仲間を知る経験
- ③ <新たな課題>
 - 行きたいクラスに行き遊んでいる。選択制を取ることで、子どもを尊重、主体性を大切にしているように一見思われがちだが、本当にそうか？実際、3 歳児が 5 歳児のクラスに行き、体操の時間一緒にやるでもなく、手の空いている大人に抱かれていることが多く見受けられる。3 歳児にとって、意味のある時間になっているのか、保育者の子ども理解、保育に対するねらいの定め方が問われるように感じる。一緒に過ごすことでどんな育ちあいに繋がっているのか吟味していくことが大切なのでは？（吉田より）
 - 異年齢で過ごすことに新鮮さがなくなり、自分の部屋で過ごしたい、同年齢の

仲間と過ごしたい子どもが増えてきている。また、おもちゃによって、集まってくる人数に偏りが出てしまっている。全クラスに同じ玩具を置いた方が良いのか？→その必要はない。それぞれの場があってこそ、選択制が生きてくる？何処の部屋も子どもにとって魅力的になるよう違った魅力的な環境づくりを保育者は、考えていけばよいと思う。（保育の質の向上に繋がる）

【10月9日】

➤ 主任保育士と保育の振り返り（インクルーシブ保育実践の経過報告含む）

- ① 午前中の過ごし方として、好きな場所で過ごしていいことにしているが、以前のような活発な交流は見られない。食缶が揃い、昼食時の交流がはじまったところである。
- ② 吉田より提案。インクルーシブ保育＝異年齢で「かかわり合う」「活動と一緒にする」ことばかりに囚われなくても良いのでは？5歳児の子どもたちの遊びが充実していたら、その姿を見て3、4歳児は学んでいくはず。（そこにも育ちあいがある）関わり合うことばかりに囚われて、5歳児の遊びが物足りなくなってしまうては、そちらの方が問題に感じる。探求する、工夫する、広げる、深める（科学的思考）遊びの保障を考えてみるのはどうだろうか…

➤ 5歳児担任、園長と保育の振り返り

- ① ままごとコーナーについて。子どもたちは、大好きで良く使用しているが、発展がない、工夫もない、気付くとじゃれているだけだったりする状況⇒既成の食べ物ではなく3歳児で提案した、素材を用意し、工夫したり、見立てたり、考えて遊べる場にしていってらどうか…。3歳では、モデルがないこともあり、口に入れたり、投げたりしてしまったため、5歳の遊びから変えていくことを提案。

👉インクルーシブ保育（育ちあい保育）を考えていく中で、形、方法にこだわってきたことに気が付き始めている。保育そのものに保育者たちの気持ちが向くことも合わせて考えていかないといけない。数多く保育者が保育室に居るのが良いわけではないなど深いところまで、話せるようになってきた。子どもたちは、知りたい、試したい気持ちががあり、それを実現できる遊びこそ、科学する心を育てることに繋がってくる。そこにたどり着くまで、あと一歩、手ごたえを感じている。

【10月25日】

➤ 保育園リーダー会議に出席 ※松戸市職員、公立保育所園長3名も参加

○これまでの研究の経緯と経過について（振り返り）

① <経過>

- 7月から開始、8月遊びの空間を朝から昼まで自分たちで選択し、交流していく。9月中旬から、午睡・おやつの時間の交流、10月からは、食事の時間の交流を進めている段階までいく。
- 月1回の会議にて、取組み報告及びその都度生じてくる課題と向き合っている。
- 異年齢で過ごすというスタイルだけを追うのではなく、保育そのもの、遊びや生活が個々に充実しているかどうか、保育の質（科学的思考は育まれているか）

にも着目することの重要性まで気が付いてきた。

👉 研究の経緯及び取り組み過程など話すことで、振り返りができ、今後目指すところを再認識できたように感じる。子どもたちのちょっとした育ちに気付き、職員間で共有できていることが素晴らしい。今後も語り合うことで、子どもの理解に繋げていけたらと思う。今後、遊びの空間、時間の中でのエピソードがたくさん生まれてくることを望み、保育者たちの気付きに繋げていきたい。

【11月8日】

➤ 園庭での保育観察（3，4歳児）

① <虫探しの3歳児と4歳児のやり取り>

3歳児C「幼虫とミミズさがしたい」

4歳児A「見つけたらぼくにお願ひしてよ！（とってあげるから）」

3歳児C「葉っぱあるよ」

4歳児A「うん、葉っぱあげよう」

② <4歳児幼虫集め>

お椀に土を入れ、その中に幼虫を大量（10個くらい）に入れている。

吉田「このままだと乾いちゃって、幼虫困らない？」とたずねると

B児「カビ？になるから大丈夫」とのこと

吉田「ケースに入れて飼って見たら？なんの幼虫か、育ててみたら面白くない？」

B児「お母さんが嫌がるから…」

お昼の時間となり、どこにおくか（とっておきたい）迷っている。それだけ大事なものであることが伺える。

➤ 3歳児担任、主任と保育振り返り

① 子どもたちは、科学の目で生き物に興味を持っている。環境を整えて、この興味関心の芽を膨らませていかないのは、もったいないこと。今は、生きているものに対してただ集めたり触ったりしているだけだが、おもちゃにするところから始まり、そこから関わり方も変わってくるはず。畑を作る。草花を植える。昆虫ケースで虫を飼う。幼虫を育てる。など庭環境も考えても良いのでは？と伝える。

👉 保育者たちが、学ぼうとする気持ちが強く、活気がある。しかし、「環境に子どもが自ら働きかけ、応えをもらう」という実際の保育体験が少ないのかもしれない。たくさん科学の目、興味関心の芽が落ちているので、そこを1つずつ掘り下げて考察していきたい。

【11月15日】

➤ 保育園リーダー会議に参加

① <前回の会議から今日までの振り返り>

▪【5歳児】食事の時間、自分のクラスに残る子と他のクラスにいく子とそれぞれの姿が見られる。おかわり沢山出来る（3歳児のクラス）、体操の時間のあとゆっくり自由にすごせるなど理由あつての行動と取れる。

② <月案・週案>

- 週案があることで活動に縛られてしまうことを懸念し、月案1本の指導計画にするのはどうか。
- そもそも週案を変える理由は？→育ちあい保育（縦割り保育）をしていくと、ねらいをどこに合わせて書いたら良いのか分からなくなる。保育形態を変えていくとしたら、週案の書き方そのものを検討する余地あり
- 現行の週案の良いところは？→今日何をやるか、配慮点書ける
- 計画の中心は、これまで一斉活動だった（体操・英語・造形…）
→一斉活動をなくしていきたい！子どもたちの何を育みたいのか、どう育みたいのか？
- これまで一斉活動に頼った保育をしてきた。保育者発の保育（提示型）→子ども発の保育（興味関心に即した保育・子どもの遊びからの発展型）へと発想の転換が必要なのでは？と提案する

👉 保育の在り方自体、根幹の見直しの必要性にまで、話し合いが深くなってきている。一斉保育中心の保育そのものにやりづらさを感じてきている。これまで、「遊びを通して育つ」という視点から保育がなされていなかった（遊びは休憩時間的な捉え方）故にこれまでの保育に疑問を感じ始めたことは、保育そのものを見直す良い機会と考える。

【12月13日】

➤ 保育園リーダー会議に参加

① <前回の会議から今日までの振り返り>

- 【5歳児】3歳児に対し、あかちゃん扱いしすぎて、嫌がられることで、3歳児も成長していることに気付く。良くない言葉、威圧感ある言葉を真似る姿を目の当たりにし、自分たちの言動を気をつけようと仲間同士声を掛け合うようになる
- 【4歳児】3歳児がこれまでやってもらってきたことをやってあげたくなつての発言や行動（教えてあげる、お世話をしたい）を受け入れてあげる。（言わせてあげる、やらせてあげる）→寛容な心（4歳児としての心の育ち見られる）
- 【3歳児】やってほしくないこと、手を必要としていないことは、はっきり表現するようになる
- 4, 5歳児をまねて（憧れて）自分でやりたいという気持ちが育つ
* 実際手を貸す5歳児 見て学べの4歳児 それぞれの姿がある

② <エピソード記録>

- たくさんのエピソード、個々の様で繋がっている
指導計画を難しく考えないで、このエピソードこそ、計画の基になる。
- 子どもが夢中になることが大切→面白いと感じているときは、学びが入り、気付きも入る。子どもの姿を見て考えていく保育をしていくことが大切
- 計画→みとり→次が見えてくる。振り返る力が大切。

何であの子はこんなことをしたのだろうか？と考えることで自分の見方、考え深くなる→保育者の力になる

- エピソードに 10 の姿がたくさん盛り込まれている。そこを見抜けるかどうかで保育者の関わり方変わってくる。
- 子ども同士の方が良い場面沢山ある→そこに気付ける保育者は凄い。大人がやらないと子どもは育たないという考えは良くない。子どもたちの中にこそ、育みと学びがある→大人も子供も気づきが最も大切

👉 前回、指導案（指導計画）をどう変えていくかでつまずき、自分たちが目指していることを見失ってしまったような雰囲気になった。とりあえずエピソード記録を取ってみようということで今回出し合ってみると、子どもたちの姿の中に学びの要素がたくさん詰まっていることに気付き、その姿を振り返ることこそ、次の保育の手立てが見えてくることに気付くことができた。自分たちで子どもの姿を読み取る事の大切さに改めて気付けたことは、大きかったと思う。園内改革は、このようにつまずきながらも職員間で話し合いを重ねることが何よりも大切なことである。新たな一歩を踏み出せたように感じる。エピソード記録を今後も取り続けることで、いずれ遊びの質への追求に向かえたらと期待する。

着替えを手伝う姿。



絵本の読み聞かせをしている姿。



優しくおでこをさすっている姿。



ナース Toys で遊ぶ姿。



バギーを押してお散歩に連れ出す姿。



「あっちへ行こう！」と、遊びに誘う姿。



傾聴している姿。



英語の時間にお互いの鼻を見つけ触れ合う姿。



優しく見守られながら塗り絵を楽しむ姿。



食事中の会話を楽しむ姿。



活動を通じての感想等

【施設の感想等】

◎・3歳児の環境では、変えた後はしばらくこどもたちも落ち着いていたが、慣れてくると落ち着きがなくなっていた。その中でも、吉田先生にアドバイスをいただきながら、少しずつできることから環境を変えることで落ち着いていったように感じる。

ダンボール遊びでは、ダンボールハウスから引っ張る遊びにしたり、絨毯にしたりと変化させながら遊びを展開していた。ダンボール電車では、周りに画用紙を巻いたりしたが、遊びがダイナミックなこともあり壊れることが多々あった。壊れてしまい遊びが終ってしまったが、遊びを継続(長い単位で1年など)していたら変化がみられたのかとも思いアドバイスを活かしきれずに申し訳ない気持ちになった。

・5歳児クラスでは、おままごとの食べ物が少なく、遊びが発展しないという悩みから、作ってみてはどうかというアドバイスをいただいた。牛乳パックの廃材を飲み物に見立てたり、折り紙でお寿司を作るなど工夫した。今まで、おもちゃで遊ぶことが当たり前だと思っていたが、保育者もおもちゃだけに頼らずつくる楽しさを工夫したいと感じた。また、環境では異年齢保育を行うようになり、3歳児が5歳児の保育室に来た際、ハサミが手の届く所にあることが危ないと気づいた。どのような環境にしたら良いか吉田先生にアドバイスをもらった際、こどもたちに聞いてみるのも良いかもしれないと言葉をいただき、こどもたちと話しあう時間(サークルタイム)を行うと、保育者が考えていた考えではなく、色々な意見がこどもたちから出てきたことに驚いた。また、こどもから発信してくれたことで、みなが約束を守ろうとする姿が見られた。

・各クラスの悩みや園自体の課題など、吉田先生に相談をするとたくさんのアドバイスをいただいた。1つではなく複数のアドバイスをいただいたことで、いくつも試すことができたことがありがたいと感じた。

特に3歳児は配慮を必要とするお子さんが多いので、環境設定や保育のあり方等で、保育者も頭を悩ますことが多々あった。その中で吉田先生と振り返りを行う時間は、保育者の気持ちや考えをリセットできる時間となった。また、今年度は異年齢保育についての悩みも多く、実際異年齢保育をしていた吉田先生のお話はとても学びになった。まだ異年齢保育を始めて1年なので、行き詰ったりすることもあるが吉田先生から教えていただいたことを実践しながら、こどもたちも私たち職員もワクワクできる保育園づくりをしていきたいと感じた。

【アドバイザーの感想等】

先生方の子どもたちの為に「保育をより良くしたい」という気持ちが溢れていて、その前向きな姿勢に感動致しました。そして、子どもたちの1つ1つの姿を育ちの姿として見逃さず、気付きとしているところが素晴らしかったです。なかなか自分たちの保育を根本から見直そうとすることは、難しいことだと思います。それを子どもたちの為に、そして自分たちのやりたい保育の実現に向けて開拓していこうとするパワーは、凄いです。このパワーの源は、子どもたちを愛しているということそして、保育者同士の良好な関係性にあると確信しています。保育は人なりです。今後も引き続き、保育の探求に努めて下さい。遊びの充実、環境の充実、子どもたちが遊びをクリエイトしていく、そんな姿の先には、たくさんの育ちあいが見えてくると思います。そして、本活動の中心となっている「科学的思考力」もおのずと育っていくように感じています。「子どもは小さな科学者です」大人がそのチャンスをつぶさず、共に探求し、深めていける、そんな保育環境を是非目指していった頂きたいと思います。

活動全般を通じての感想等

富田 久枝 総括保育アドバイザー(千葉大学名誉教授、前教授)より

1. 示された視点から・・・

この「保育アドバイザー」派遣の事業の開始に先駆けて、県から示された視点を先ずは用いて何を学び、何をアドバイスしようとしたのかを確認しようと思います。

◎示された視点

「千葉県が考える科学的な見方や考え方を育む保育とは」について探求することを目的として、保育アドバイザーは担当園に赴き、共に考え・創る活動を展開しました。上記の「科学的な見方や考え方」の基本的なイメージについても触れておきたいと思っています。ソニー教育財団で示している「科学する心を育てる」という内容を基に千葉県もその以下に示したイメージを構築してこの事業に取り組みました。

◎イメージ

『日常の保育の中で、子ども自身が持っている育つ力・主体性を大切にしながら子どもの興味・関心を高め発見や気づきから探求心・思考力・想像力・物事を予測する力を育てていくような保育』以上のように定義することから始まりました。

2. 私と「科学的な見方・考え方」との出会い

この「科学的な見方・考え方」との出会いは平成元年から始まった5領域の前にあった6領域の時代に遡ると私は思いました。なぜなら、私が保育者として子どもとの日々を力を注いでいた時期は6領域の真ただ中、領域名からは「自然」という最も身近な領域が有ったお陰で「科学的な見方・考え方」は当たり前のように保育の内容の中に息づいていました。当時は、自然環境の中に内在する「不思議」を体験することから自然科学との出会いを期待したものと今は理解しています。そのような時代でしたので自然環境を学びの教材にする動きや流れは盛んで「ネイチャーゲーム」といった自然環境から多くの科学的な知識を無理なく学べるアプローチなども多く取り入れられた時代があり、その時代からの軽傷を思い取り組みました。このような、時代の中に有った私には又と無い楽しい体験のチャンスが来たと感じました。

3. 各園の実践から見えてきたこと：統括アドバイザーとして

本取り組みは、協力園を探すことから始まり、協力を得られた園の実践をアドバイザーが「科学的な見方・考え方」と結びつ着けながらその価値や意義を読み解いた取り組みだったと各園の実践を見て感じました。身近な遊具であるラキューとの子どもの出会いとその遊びの発展から科学的な見方や考え方を読み解いた実践、栽培や自然物の出会いから発展させて「米作り」や虫との出会いから、言葉遊びや数遊びといった日常的な遊びの中から「科学性を発見する取り組み・見える化」を強調して子どもたちが科学的な見方や考え方と出会えるようにアプローチした園など、園の持ち味を生かしながらの取り組みが報告されて、実践に根差した「科学的な見方・考え方」を追求できたと大変うれしく思いました。

4. 保育アドバイザーとして参加して・・・

保育現場に赴きながら、「今・ここで」の保育を大事にし「科学的な見方・や視点」に保育者がどうやって近づいていけるのか、子どもはどのような環境を工夫すれば近づけるのかといった新たな私のチャレンジでした。まずは、園のありのままの環境に沢山のヒントがあると考え、子どもたちの気持ちを引き出す工夫として「廃材も透き通った収納箱に入れて、何がどれくらいあるか分かるようにしようと提案したことが始まりでした。子どもの興味や関心をよりリアルで積極的なものへと導く環境の見直しから始めたことを思い出します。そして、保育に参画する中で子どもたちの何気ない遊びの中に「自然科学」の知見の萌芽が有ることを保育者と共に実感しながらその面白さに気づく日々でした。ラキューコマに如何に小さなパーツを乗せるかで遠視引力の影響を受けないかが遊びとなっていて、その発想に驚かされました。葉っぱの観察では雨上がりに表面張力に子どもたちは目を輝かせて驚き、雪で作ったお団子は並べて置いたら、溶けたところがみんなくっ付いて繋がっちゃっちゃった事件や、オクラという野菜は種だらけだけれども、がくの中に本当に大事な隠し種があることを発見したり・・・科学性は沢山の遊びの中に内在する楽しい視点であることをアドバイザーとして学ぶことが出来ました。

活動全般を通じての感想等

篠原 孝子 総括保育アドバイザー(聖徳大学大学院講師、前教授)より

アドバイザーの皆様の1年間にわたるご指導に感謝申し上げます。保育士主体の園が多い現状の中で、保育アドバイザーの関わりにより子ども主体（子どもの興味・関心に寄り添い思考の気づきを促す）保育の展開が可能になることが実証されたと思います。

○年間7～19回保育アドバイザーが関わることにより各園の保育の質が確実に向上

- ・園の現状や課題に応じて活動テーマを共有し取り組んだことで成果が明確になる。
- ・遊びの充実が科学の目を育む気づきにつなげていきたい。(富田先生・吉田先生)
- ・保育士の気づきが促され、子ども主体の保育に変化しつつある。(羽田野先生・吉田先生) ➡科学的思考力の前提となる子どもの興味関心に寄り添い気づきを促す保育実践
- ・科学的視点が明確になることで、子どもの姿から学んでいることの理解が深まる。
- ・保育士が自然や科学の視点で保育を見つめる楽しさ、子どもの姿を捉える楽しさを味わっている。(富田先生・谷先生)
- ・アドバイスを実践の中で試すことで、保育室環境作り（時間と場、モノや掲示物等）が重要であることに気付いている。(吉田先生・堀江先生)
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識することで、育ちが明確になる。(富田先生・谷先生)
- ・子どもが本来持っている科学性は環境と意味ある出会いをすることで引き出される。(富田先生)(羽田野先生) 物的・人的な環境との出会い方の工夫が重要。
- ・アドバイザーがモデルとなり、一人一人を認め、共感する姿勢や問いかけを示すことにより、保育士や子どもが科学的視点に目を向ける力となる。
- ・本音が出しやすい関係になり、新たな課題に向かうように変化する。(吉田先生)
- ・訪問園との信頼関係づくりから取り組むことが最重要。(羽田野先生)
- ・保育を共に振り返る場は、園は複数のアドバイスを得て有効、アドバイザーは成果や課題、次の方針を考える機会となり貴重な時間となる。

○今後に向けて

- ① 取り組み園の保育の質をより高めるために、子ども主体の保育を実践している園を参観する機会をもつことが有効と考える。
(例 塩焼第二保育園は塩焼幼稚園の研究会に複数回参加)
- ② 地域全体の保育の質向上に取り組むために、各園の取組の経験を活かして広げていく取り組みを行う。
 - ・取り組み園の公開保育・協議会を実施する。
 - ・県市町村の幼児教育関係機関等と連携し取り組み園の成果発表の場を開催する。
例：千葉県総合教育センター研修企画部基礎力育成班と協働は可能か？
(幼児教育アドバイザー研修「理系教育の基礎を培う指導のあり方」)